

1 *Henry IV* における政治学

— うつろな王冠と自己成型 —

則 藤 力

この作品は第一部、第二部という二部作の形式になっているが、両者の関係は本来どうであったか定かではない。つまり、はじめから二部作として構想されていたのか、それとも第二部が後から書き加えられた続編なのかという議論があったが、それはともかくとして、素直に読めば第一部、第二部を通して、Henry IV に対する反乱の勃発とその鎮圧を軸に、王子 Henry（通称 Hal）の放蕩無頼の生活を経て自己成型を遂げ戴冠に至る歴史劇であることは否めない。

その観点からすれば、劇中、喜劇的人物として絶大な人気を博した Falstaff をこれまで余りに重大に取り扱いすぎる嫌いがなかった。確かに喜劇的人物として重要な役割を担ってはいるが、だからといって過大な評価は時として劇の主要な主題を見誤らせる危険性をはらんでいると言っても過言ではない。それはちょうど、シャイロックの悲劇性を強調するあまり、喜劇としての構成の均衡を失って主題が曖昧になるのと同様である。¹⁾ Falstaff がのさばってられるのも王子 Hal のお陰であり、彼の存在が劇全体にふくらみを持たせていることは事実であるにしても、劇の構成上王子ほど大きな役割は与えられていないことは明らかであろう。²⁾ 従って、王位についた後の Henry IV をめぐる政治的対応の筋と、王子 Hal の自己成型の過程の筋とが絡み合った構成という視点から主題を検討するのがこの作品を理解する上で妥当であると考える。

I

まず第一幕の展開においては、*Richard II* の最後の場面の台詞を受けて、Henry IV は Richard II から王座を奪った「罪の手から血を洗い清めるために」、聖地エルサレムへの十字軍遠征の準備を進めていた。ところがウェールズとスコットランドで反乱が起こり、その計画を延期せざるを得なくなるところから始まる。ウェールズに差し向けたマーチ伯 Edmund Mortimer 率いる討伐軍はほぼ全滅したと報告されるが、ダグラス伯 Archibald 率いるスコットランドに対しては、ノーサンバランド伯 Henry Percy の息子 Henry（通称 Hotspur）の活躍により勝利をおさめた。その勝利は嬉しいが、王の胸中には複雑な思いがよぎる。一つは Hotspur の輝かしい武勲に比べ、王子 Hal は戦場にも現れず、ロンドンの街中で放蕩三昧の日々を送っていること。もう一つは Hotspur が捕虜の引き渡しを渋っていることに象徴される Percy 一族の「思い上がり」ともとれる傲慢な姿勢である。それは次のウェスモランド伯の忠告にも表れているごとく、廷臣たちにも周知の事実と見てよい。

This is his uncle's teaching, this is Worcester,
Malevolent to you in all aspects,
Which makes him prune himself, and bristle up
The crest of youth against your dignity.

(I. i. 95-8)

しかしながら、このような状況を生み出す原因は、王自身にも責任があった。一つは「神の前で聖油を塗られた神の代理人」たる Richard II を廃位に追い込み、王権を奪い取って Henry IV となったことで諸侯たちにも政治的野心を目ざめさせ、謀反の正当性を主張する口実を与えたことである。事実、Richard II が生前 Edmund Mortimer を王位継承者として指

名していたことを口実に、Percy 一族は謀反を企てる。

もう一つは、王一人の力量で王座についたのではなく、Percy 一族の援護があったればこそという負い目による臣下への柔和な姿勢である。その所以は、Percy 一族からすれば、Bolingbroke (後の Henry IV) が王座につくに際して大きな力添えとなったのだから特別扱いされるのは当然のこととして期待するであろうし、かといって特別扱いは他の臣下たちの妬みを招き、ひいては離反、造反に結びつく可能性があるからである。「あなたの心労は新しい心労がはじまって心労を得たことにある」(Your care is gain of care, by new care won: *Richard II*, IV. i. 197) という Richard II の言葉通り、それは正に Henry IV が国王として担わねばならぬ王冠の重みであった。ところが得てして恩義の絆というものは、利害が絡む機会に際してはいとも簡単に断ち切られてしまう。従って、新たに国を征服した君主たるものはその力量を示さなければならない。にもかかわらず、「わしの血はあまりにも冷静、寛容に過ぎ、かさなる侮辱にも燃え上がろうとはしなかった」(I. iii. 1-2) のである。

誰しも恐れられるよりは愛され慕われるのを好むであろうが、そういった微温的姿勢はかえって君主としての威厳を損ない、侮られることが多い。それ故 Hotspur は王の命令に背いて、捕虜をおのれの用に役立てるべく手元に置き、引き渡そうとはしないのである。そのような思い上がった行動を、また Percy 一族の不遜な態度を目の当たりにして、ついに王はこれまでとは異なった「畏怖される態度をもって臨む」決心をする。

. . . : but be sure

I will from henceforth rather be myself,
Mighty, and to be fear'd, than my condition,
Which hath been smooth as oil, soft as young down,
And therefore lost that title of respect

Which the proud soul ne'er pays but to the proud.

(I. iii. 4-9)

その姿勢はいかにもマキアベッリ的であるが、いささか決断が遅きに失した感がある。これまで勝手気ままを大目に見ておいて、いきなり恐れられる存在に豹変するのは、相手に不信感を抱かせるのみならず、恨みを買うことになりかねない。実際、義弟 Mortimer を解放するための身代金を拒否されたばかりか、義弟を謀反人扱いされ、捕虜の引き渡しを厳しく命ぜられた Hotspur（燃ゆる拍車の意）は、そのあだ名のごとく猛り狂ってあらぬ事を口走る。「思い上がっている王のあざけりとさげすみに対し復讐してやる」(I. iii. 181-2) と。それをなだめる振りをして叔父ウスター伯 Thomas Percy も、Bolingbroke に荷担したおかげで一族のものが「世間から悪評を浴びせられたのだ」と恨みを露わにし、甥の激情に一層熱い拍車をかける。かくして自制心を失った Hotspur の口を通して、Percy 一族の不満や恨みが開陳され、謀反の計画が明らかにされる。

しかしながら、彼らの反乱の動機は、一概に王の責任だけに帰すわけにはいかない。いくら王擁立の恩義があるとはいえ、王権を軽んずるような言動を君主は放置しておくことはできないし、また、してはならない。義弟 Mortimer の解放のために、いかにおのれの武勇による捕虜とはいえ、王への捕虜引き渡しを義弟の身代金と交換するという条件を付けるのは、余りに王権をないがしろにしすぎている。まして、Mortimer が敵の反乱軍の将 Glendower の娘と結婚したとあらば、そのような条件を認めるわけにはいかないのは当然であろうし、また Mortimer の軍が全滅したとの報告も疑わしくなる。実際、王はウェールズの戦いの正確な情報を得たらしく、Mortimer の獅子奮迅の戦いぶりを Hotspur から聞かされても、「部下の命を敵に売った裏切り者だ」と断じてかえりみない。

従って、ウスター伯の日頃の態度、Hotspur の厚かましい身代金の立て替え要求や捕虜引き渡しを拒む慇懃無礼な言い訳、Mortimer の敵将の娘

との結婚などから謀反の動きを確証したからこそ、穏和な王から「畏怖される」王へと Henry IV は豹変したのだと言える。君主たるもの、恩義には相応に報いねばならぬであろうが、横暴を許したり、Richard II のように阿諛追従に与してはならない。その意味では Henry IV の決断は君主の政治力学に即したものであったと言える。

II

とはいえ、ウスター伯のような、或いは Hotspur のような人物の扱いは君主にとってやっかいな存在ではあろう。例えば、Hotspur はおのれの身勝手を拒否されただけで怒り狂い、ウスター伯の口車に乗せられて益々自制心を失ってしまう。王への仕返しをわめき散らし、叔父ウスター伯の反乱の計略さえ耳に入れようとはせず、戦闘での活躍と勝利の幻影に酔いしれる。叔父の言葉通り、「無数の幻影にとりつかれているが、そのくせ心に向けるべき大事な姿は目に入っておらぬ」(I. iii. 207-8) ののである。

他方、Henry IV が、Hotspur の方が「はるかにりっぱな王座への資格を備えている」(III. ii. 98) と王子 Hal に向かって苦言を呈するのは、Hal に武勇が欠けていると見えたからである。当時の君主としては確かに武勲の誉れ高いことも必要条件ではあろうが、激情に飲み込まれて猪突猛進するだけではその器とは言えない。戦の先陣では役にも立とうが、戦略の場では無能である。まして反乱軍を起こすとなれば、緻密な作戦と周到な準備が必要なことはいうまでもない。実際 Hotspur は作戦会議のうちに地図を忘れたり、Glendower の大言壮語にことごとく反発したために内輪もめになりそうになる。彼の血気にはやるだけの姿には、そういった能力の欠如を示すと同時に、君主に求められる像の、王子 Hal とは対照をなす透かし絵になっていると言えよう。

またウスター伯は、ウェスモランド伯が指摘したごとく、周囲の廷臣たちにも分かるほど王に対して傲慢な言動をする。王が「(余の) 弱みを見

抜き、それをいいことに王の忍耐を踏みつけに」(I. iii. 3-4) されたため、以後「畏怖される態度をもつてのぞむ」と宣言するや、即座に言を返す。「おそれながら、陛下、わが一族のものに限り、王権の鞭をその身に受けるいわれはありません、しかも陛下の王権がこのように強大になり得たのは、わが一族の手によってではありませんか」(Our house, my sovereign liege, little deserves / The scourge of greatness to be us'd on it, / And that same greatness too which our own hands / Have help to make so portly. I. iii. 10-14) と。

国王への恩義をちらつかせ、特別扱いをおおっぴらに要求する人物はとかく不平不満をかこちがちである。それが積み重なっただけでなく、特別扱いされないとなれば謀反に向かう動機となる。しかし謀反はそう簡単には成功しない。なぜなら、反乱を起こす者は単独では実行できないので、仲間を誘わざるを得ず、しかも不満をかこつ者に限られる。そしてそういった不満分子はいざとなれば失敗した場合の結果への恐怖や、何処まで信頼できるのかといった猜疑心にさいなまれ、結束するのが難しいからである。実際、反乱軍の組織作りは難航し、Hotspurのもとに怖じ気づいた友人から「ご計画はあまりにも危険、列挙された同士の方々は必ずしも信頼し得ず、時いまだ熟せず、強大な相手に立ち向かうにはあまりにも軽率なばかりごとかと思われます」(II. iii. 10-14) という手紙が届けられる。

例によって、手紙の相手を罵倒する Hotspur には勇猛果敢さはあっても、反乱を起こすものには殊に必要な用意周到さ、緻密さ、自制心に欠けている。手紙の内容を冷静に分析できず、ただ感情にまかせて相手を臆病だとなじるだけでは反乱は成功しない。反乱を成功に導くには、まず第一に大義名分が必要である。つまり、貴族や一般の人心が離反し、反乱を支持するだけの公然たる理由である。手紙の「時いまだ熟せず、強大な相手に立ち向かうにはあまりにも軽率」とはそれが不十分であることを指摘しているのであり、今回の計画は特別扱いされない Percy 一族の不満に過ぎないことを裏書きしていると言えよう。

第二に結束力がなくてはならない。それは大義名分ともつながっているのであるが、「列挙された同士の方々は必ずしも信頼し得ず」という言葉は結束力の欠如を物語っている。ウェールズの反乱軍を鎮圧に行ったはずの Mortimer は敵将 Glendower の娘と結婚して寝返り、Hotspur はダグラス伯率いるスコットランド軍には勝ったものの、捕虜引き渡しを巡って王と対立したあげく、捕虜を釈放し、ダグラス伯と結託しているのである。これは言ってみれば、Percy 一族の不平不満に便乗して、国王への反乱軍に加わったに過ぎない。即ち、彼らには目指すべき国家への理念もなければ、利害も必ずしも一致してはいない。

それは Glendower の居城で作戦会議のおり、王に勝利した暁に分割するはずの領地を巡って、それぞれが対立する場面にも表れている。Glendower との悶着は、後に彼が反乱軍に参加しない行動にでる一つの原因になっているとも言える。叔父ウスター伯でさえ、Hotspur の無思慮な性格について叱責し、いさめざるを得ない。

In faith, my lord, you are too wilful-blame,
And since your coming hither have done enough
To put him quite besides his patience;
You must needs learn, lord, to amend this fault.

(III. i. 171-4)

いくら勇気や気力があっても、人の目には「粗暴な短気」「見苦しい無作法」「自制心の欠如」「傲慢」「不遜」「他人を見下す思い上がり」といったものにしか見えず、そういった欠点が「貴族に宿れば、たちまち人望を失わせるばかりか、そのほかにいくら数々の美点があろうと、その上に大きな汚点をしるし、当然受けるべき人々の賞賛を吹き消してしまうのだ」(ibid., 177-83) と。

マキアベッリも指摘している通り、謀反の「誓約を守るとすれば、無二

の友であるか、とことん君主の宿敵であるか、その場合しかない」³⁾のである。Percy 一族に大義名分も結束力もないのであれば、反乱の失敗は目に見えている。しかもあろう事か、最大の兵力を持つ反乱の盟主たるノーサンバランド伯が病気で援軍を送れないとの報告が入る。ことの性質上、兵力の分散を許してはならぬのに、中心人物とその兵力が削がれては話にならない。

ウスター伯の漏らすごとく「ノーサンバランド伯は保身の知恵と、王への忠誠心と、われわれの挙兵への一途な嫌悪の念から、ここには来なかったのだと。そのような憶測は臆病風を吹き送って反乱の高まりをたちまち引き潮に転じさせ、さらにはわれわれの大義名分にまで疑いを生じ」(it will be thought, ... / That wisdom, loyalty, and mere dislike / Of our proceedings kept the Earl from hence; / And think how such an apprehension / May turn the tide of fearful faction, / And breed a kind of question in our cause: IV. i. 62-8) させかねない。実際、第二部では仮病を使ったとの噂が流されている。

更に追い打ちがかけられる。Glendower も予言のせいにして参戦が遅れるとの報せが入る。ここまで結束が乱れては、もはや反乱の成功はおぼつかない。さすがの Hotspur も運に委ねるしかない現実を認識する。

Doomsday is near; die all, die merrily.

(ibid., 134)

III

王位の正当性を持たない Henry IV にとって、国を掌握するのは彼の力量いかんにかかっていることは言うまでもない。つまり、彼の一挙手一投足に対する他者の判断によってしか、王の地位にふさわしい、いわゆる「正当性」は示されない。言い換えれば、王としての器という、一種の

「型」を演じ、その成型によって真の王であることを証さなければならぬのである。

そのことは「滅多に姿を見せなかったからこそ、わしが動けば彗星を見るように人々は驚異の目で仰ぎ見たのだ、〈あ、あの人だ〉と子どもたちに教えるものもあれば、〈どの人がボリングブルックだ？〉と聞くものもいた。そこでわしは、天上から盗み取ったあらゆる美德を面に現し、謙遜の借り着を身につけた、そうしてわしは、人々の胸から忠誠の誓いを、その口から歓呼の叫びを、もぎ取るように手に入れたのだ、それも、王冠をいただいた先王の目の前でだ。こうしてわしはこの身を常に新鮮にしておいたので、わしの姿は、滅多に拝めぬ法王の礼服のように、見られるときは必ず驚異の目をもってみられ、たまにしか訪れぬがそれだけに華やかなお祭りのように、現れればたちまち王としての威厳をかちえたのだ」(III. ii. 46-59) と、王子 Henry (通称 Hal) に向かって王のかつての自己成型を語る台詞にも見て取れる。

ところが「冷静で寛容」な美德という王の成型は、Percy 一族の勝手気ままな言動と謀反を招き、ついには「王者にふさわしい畏怖される」態度を取らざるを得ない。即ち、君主たるもの、人間いかに生きるべきかだけでなく、人が生きている現実をも見据えて行動しなければ逆に破滅を招くこともあり得るのである。善き行いをなしても、悪しき人々に滅ぼされることもあるのが現実であれば、君主たるものは「寛容」と「畏怖」の両方を使い分けなければならない。それは王位篡奪による王権の相対化がもたらした不安定な一連の圧力の中で、Henry IV が絶えず王を演じ、王の権威が実体を伴うまで偽装し続けなければならないことを意味している。

一方、Hotspur の頼もしさと比べてあまりにも無様な息子と、父王から嘆かれる Hal は、いわばその対角線から自己成型を試みていると言えよう。つまり彼がロンドンの街中でいかがわしい連中と遊びほうけているのは、いかに巷の垢にまみれているように見えても、洗い落とせば「黒い地金にはめ込まれた黄金細工のように」光り輝くのであり、その隔たりが大

きければ大きいほど君主としての価値が増幅されるというのである。

I know you all, and will awhile uphold
The unyonk'd humour of your idlness.
Yet herein will I imitate the sun,
Who doth permit the base contagious clouds
To smother up his beauty from the world,
That, when he please again to be himself,
Being wanted he May be more wonder'd at
By breaking through the foul and ugly mists
Of vapours that did seem to strangle him.

•
•
•

And like bright metal on a sullen ground,
My reformation, glitt'ring o'er my fault,
Shall show more goodly, and attract more eyes
Than that which hath no foil to set it off.
I'll so offend, to make offence a skill,
Redeeming time when men think least I will.

(I. ii. 190-212)

言い換えれば彼の放蕩は、後に国王になった折り人心を掴むための戦略であり、君主としての自己成型を図っていたということになる。そしてこの台詞が劇の早い段階で吐露されるため、観客はこの枠に沿って王子 Hal の言動を見てゆくことにならざるを得ない。

例えば、Falstaff に追いはぎに荷担するよう誘われても、彼は参加しようとしなない。そこにはいかに放蕩無頼の生活を送っているにしても、いずれは国王になる身として、一線を画している姿勢をかいま見ることが出

来よう。また、追いはぎを止めも咎めもしないのは、いずれ国を治める君主として、今はただ庶民の生活の有り様を知っておく期間だと見なされる。実際、第二部においては Falstaff の逸脱は厳然と罰せられることから見て取れよう。

そればかりか、王子 Hal が身を置いている世界は、一幕一場の反乱軍との戦況が時々刻々と報告される緊迫した現実とは対照的なそれである。Poins の計略に乗って Falstaff たちに追いはぎをさせておいて、それを二人で略奪し、Falstaff がどのような言い訳をするか、それを笑いものにするのは正に祭りに演じられる笑劇そのものである。戦争という生死を分かち峻厳な世界とはまるで対照的なたゆたいの中で、殊に Falstaff という肥満体で大食いのおおぼら吹き、酒がなくては生きてはゆけぬ口の減らない道化的存在が、人間の生きている現実に対する、Hal の人間認識に連なっていると言える。であればこそ、Falstaff の言葉が嘘だと Hal は知っていながら、また逆に Hal が信じていないことを Falstaff も承知の上で、お互いに馬鹿騒ぎを楽しむことが出来るのである。

それは例えば Hal が Hotspur を倒したにもかかわらず、Falstaff が自分の戦功としてぬけぬけと恩賞を要求しても、それを苦笑いしながら受け容れてやる姿勢にも現れている。Hotspur が Glendower の大言壮語にことごとく反駁したこと、彼の気分を害し、結局彼の参戦を遅らせるきっかけを作ったのと対照的である。これは Hotspur が人間理解に対して狭量であるのに対し、Hal は複雑な人間存在の多様性を認識した、未来の君主としての器量を持っていることを暗示し、彼の放蕩三昧が一種の帝王学に通じるものとして観客に許容される要因となっている。それは見習い給仕をからかう理由を Poins に尋ねられて、「おれは今あらゆる気分を味わっているのだ、あの昔々のアダムの時代から今日今夜生まれた十二時まで、人間が味わったありとあらゆる気分をな」(I am now of all humours that have showed themselves humourous since the old days of goodman Adam to the pupil age of this present twelve o'clock at

midnight. II. iv 90-2) という台詞にも要約されていると言ってよい。

そして改悛の証を示す、未来の君主像を具現する役割を果たすときが来、両軍の犠牲を最小限にとどめるべく Hotspur との一騎打ちを申し出るが、ウスター伯の思惑によって実現はしなかった。しかし、戦闘が始まると勇猛果敢さを発揮し、父王の危機を救い、更に Hotspur をうち倒して自軍の勝利に導くことが出来た。これはいわばイーストチープに巣ごもる不如意な王子 Hal から、Hotspur の独占してきた武勇と名声を奪い取った王子 Henry への自己成型は、父王の抱えていた課題への一つの答えとなっていると思われる。また、反乱の矛をおさめて恭順を示すよう寛大な申し出をする王と相俟って、君主としての成型が示されてもいる。即ち、「…^{えいまい}英邁な君主は、貴族を追いつめず、しかも民衆に満足を与えて、民衆が安心して暮らせるように腐心してきた。これが君主の心がけの中で、一番肝心な一つである」⁴⁾ という言葉に要約されよう。

しかしながら、追いはぎの件で王子たち二人に一杯食わされて、大立ち回りの嘘がばれ臆病ぶりを笑われても、恐れ入ることもなく、王子は獅子の子だから本能的に立ち向かえなかったのだとうそぶいて憚らない Falstaff は、負け戦を予見しながら「…ここにいるものの何人かは、天の定めるところにより、二度とこのようなあいさつを交わせなくなるのだから」(V. ii. 99-100) と出陣する Hotspur とはある意味で対極をなしている。

例えば Hal と「王様ごっこ」をやっても、王子役であれ、王様役であれ見事に演じてみせる。どんなに窮地に追いつめられても当意即妙に切り抜けていく。嘘をついてもつかれても、からかわれてもそれを楽しむ。酒が飲め、腹一杯食え、楽しめれば文句はない。人生謳歌、飽くなき生への本能に執着する Falstaff は、相手が強ければ戦場でも死んだ振りをして憚らない。現世こそ何ものにも代え難いと信じている彼にとって、生命は至上のものである、それ故「名誉」のために一身を捧げるなどは言外である。

What is honour? A word. What is in that word
honour? What is that honour? Air. A trim reckoning!
Who hath it? He that died a-Wednesday.
Doth he feel it? No. Doth he hear it? No. 'Tis
insensible, then? Yea, to the dead. But will it not live
with the living? No. Why? Detraction will not suffer
it. Therefore I'll none of it. Honour is a mere
scutcheon—and so ends my catechism.

(V. i. 134-41)

この痛烈な批判、したたかさを、人間の生きている現実を、王子 Henry は知っている。だからこそ、正当な王位継承権の実体を持たぬ君主父子の
負わねばならぬ課題は、自己成型のありようなのである。しかしながら、
自己成型が、敵意あるものとの関係によって達成されたとしたら、うつろ
な王冠を巡る政治の力学によって解決せねばならない危うさは常につきま
とうことになる。

テキスト

A. R. Humphreys (ed.), *The First Part of King Henry IV* ('The Arden
Shakespeare,' London, Methuen, 1960)

(注)

- 1) 則藤 力 『*The Merchant of Venice* についての一考察』親和女子大学
「英語英文学」第5号 1985
- 2) J. Dover Wilson, *The Fortunes of Falstaff*, (Cambridge University
Press, 1970)
- 3) マキアヴェッリ『君主論』池田 廉 訳 「マキアヴェッリ全集」1 筑摩
書房 1998
- 4) 同上